

中高ドイツ語における *lâzen* と *heizen*

—— 中高ドイツ語における使役の助動詞の分布とその変遷 ——

井 出 万 秀

目 次

1. 現代語 *lassen* 文における意味解釈
 - 1.1. 意味解釈分類基準
 - 1.1.1. 「放置」
 - 1.1.2. 「許可」
 - 1.1.3. 「使役」
 - 1.1.4. 「惹起」
 - 1.1.5. 「原因」
 - 1.2. 「Kausativ 体系」における *lassen* — 「間接的作用」のシグナル
2. 中高語 *lâzen* 文における意味解釈
 - 2.1. 意味解釈分類基準
 - 2.1.1. 不定動詞の主語が「もの」、「こと」のみの動詞
 - 2.1.1.1. 「ひと」の3格を伴う *ergân*
 - 2.1.1.2. 「ひと」の3格を伴わない *ergân*
 - 2.1.1.3. 「ひと」の3格を伴う *geschehen*
 - 2.1.1.4. 「ひと」の3格を伴わない *geschehen*
 - 2.1.2. 不定動詞の主語が「ひと」および「もの」、「こと」である動詞
 - 2.1.3. 不定動詞の主語が「ひと」のみの動詞
 - 2.1.4. まとめ
3. 中高語 *heizen*
 - 3.1. 不定動詞の意味上の主語の有無
 - 3.2. 社会的に一定した場面における不特定の人間
 - 3.2.1. *gân heizen*
 - 3.2.2. *tragen heizen*
 - 3.2.3. *bereiten heizen*
 - 3.2.4. *schenken heizen*

0. は じ め に

中高ドイツ語（以下中高語と呼ぶ）の『Das Nibelungenlied』の現代ドイツ語（以下現代語と呼ぶ）との対訳で、次のような箇所が見られる。なお本稿の引用内でのイタリック体は筆者による。

(1) *man gap in herberge unt hiez behalten ir gewant.* (1433, 4)

(1') *man wies ihnen Quartier an und ließ ihnen ihre Kleider aufbewahren.*

中高語では *heizen* が用いられているが、現代語訳では *lassen* が用いられている。また次の

ように,

(2) ir ros *hieze* man behalten unt ir schilde von der hant. (405, 4)

(2') Man *gab Befehl*, ihre Pferde in den Stall zu führen und ihnen ihre Schilde von den Armen zu nehmen.

“Befehl geben”と訳されている場合もある。もちろん中高語 *lâzen* が現代語でもそのまま *lassen* で訳されている場合もある。

(3) *lât* in uns tragen hinnen daz wir den recken begraben. (2265, 4)

(3') so *laßt* uns den Recken forttragen und ihn begraben.

これらの用例より、中高語の *lâzen* は現代語の *lassen* と多少異なった使われ方をしていたと推定される。そして現代語では用いられることはないが、現代語の *heißen* にあたる中高語 *heizen* に、現代語 *lassen* と共通する用法が存在したのではないかと推測される。本稿では中高語の *lâzen* と *heizen* の関係について考察するとともに、中高語 *lâzen* から現代語 *lassen* への意味の変遷についても考察する。なお分析の対象とするテキストは『Das Nibelungenlied』¹⁾で、本稿で「中高語」と言った場合、正確には『Das Nibelungenlied』における中高語のことであるが、このテキストを中高語の諸特徴を備えた代表サンプルのひとつと仮定して分析を進めて行く²⁾。

1. 現代語 *lassen* 文における意味解釈

中高語 *lâzen* と *heizen* を比較する際、現代語の *lassen* 文の様々な意味解釈が中高語 *lâzen* 文の意味解釈ではどのように対応するか、現代語 *lassen* 文にはあるが、中高語 *lâzen* 文にはない（またはその逆の）意味解釈はどんなものか、という点を分析の手掛かりとした。したがってまず現代語 *lassen* 文の意味解釈を概観する。

ここで用いる「*lassen* 文の意味解釈」という用語についてであるが、現代語を例にとってみればわかる通り、*lassen* が様々な不定動詞とともに用いられ、コンテキストの中であって初めてある一定の解釈がなりたつ。*lassen* そのものに「意味解釈」があるのではなく、コンテキストで実際に用いられた *lassen* を含む文にある「意味解釈」が与えられている。これに対し「意味」と言った場合には、ここではこのような「意味解釈」を包括するような抽象的なものを指し、「意味解釈」と区別する。このような関係が *lâzen* にも該当するかどうかは分析をした後でなければわからないが、*lassen* の分析と条件を同等にするため *lâzen* に関しても、文の「意味解釈」と *lâzen* そのものの「意味」とを区別する。

1.1. 意味解釈分類基準

lassen の様々な意味解釈については、辞書はもちろんのこと文法書でも必ず取り上げられている³⁾。大まかに言って“*veranlassen*”と“*zulassen*”のふたつがあげられるが、これは *lassen* の意味解釈を近似の別の語彙で言い表したにすぎず、どのような基準に基づいてこの両者を分けるかは明瞭でない。ここではできる限り意味解釈の客観性を保つためにも、*lassen* とともに用いられる不定動詞のあらわす事柄と、*lassen* の主語となっている「もの」、「こと」、「ひと」との間の時間的關係および意思的關係に基づいて、「放置」、「許可」、「使役」、「惹起」、「原因」の意味解釈を認める。

1.1.1. 「放置」

この意味解釈では、不定動詞のあらわす事柄は、*lassen* の主語が何らかの形でその事柄に関与する以前から存続・継続しており、*lassen* の主語はその〈存続・継続している状況に何ら変化を与えない〉、〈そのままにしておく〉ということがあらわされている。そのコンテキストでは存続・継続している事柄の担い手（不定動詞の1格補足語にあたるが、ここでは以後意味上の主語と呼ぶ。*lassen* 文の中では、4格、前置詞句で表現されるか、省略される。）の意思は問題とならない。なお以下の現代語の用例はギュンター・グラスの『Hundejahre』⁴⁾からで、引用文中のイタリック体は筆者による。

- (4) Es war einmal ein Mädchen, das hieß Tulla und *ließ* auf ihrer Kinderstirn viele kleine und große Pickel *blühen* und *welken*. (S. 891)
- (5) Felsner-Imbs mußten elektrisches Licht……*brennen lassen*, wenn am Vormittag oder Nachmittag, während draußen der Sonnenschein Orgien feierte, (S. 762)

1.1.2. 「許可」

不定動詞のあらわす事柄は、「放置」の場合と異なり *lassen* の主語の〈何らかの関与があって初めて生起する〉。このことは次の「使役」にも共通する。「許可」の場合には、不定動詞にあらわされている事柄を実現したいという「意思」、「イニシャティヴ」といったものが、不定動詞の意味上の主語の側に存在し、*lassen* の主語がそれを許可するという形になる。

- (6) Hüttenwerke in Indien werden von Mehlwürmern projiziert, die, hätte man sie in Nickelswalde, rechts der Weichselmündung *wohnen lassen*, der Volksrepublik Polen Projekt gemacht hätten; aber die Polen wollen sich vom ostdeutschen Mehlwurm nicht helfen lassen. (S. 996)

1.1.3. 「使役」

不定動詞のあらわす事柄が *lassen* の主語の〈何らかの関与があって初めて生起する〉ことは「許可」の場合と共通であるが、「使役」の場合には、事柄生起への「意思」、「イニシャティヴ」は *lassen* の主語の側にあり、*lassen* の主語はある事柄を自分以外の人間を通じて実現させるという形になる。

- (7) eine leicht beschädigte Bockswindmühle, deren Dach er *flicken läßt*, (S. 991)
- (8) in alphabetischer Reihe, streng nach dem Klassenbuch, *ließ* er die Schüler *vortreten*, (S. 823)

「許可」、「使役」における事柄生起への「意思」、「イニシャティヴ」の所在は、コンテキストによって判断する。この場合のコンテキストは、社会的背景なども含めた総合的な知識まで含む。たとえば(6)の場合、第2次世界大戦前後のドイツ、ポーランドの関係を知らなければ、「Mehlwürmer」が誰のことを指し、「rechts der Weichselmündung wohnen」ということに関しての“die Polen”との意思関係を解くことができない。

1.1.4. 「惹起」

これは lassen の主語が、不定動詞であらわされる〈事柄の存続・生起を妨げない〉、〈許す〉、〈命令する〉というような「間接的な作用」をあらわすのではなく、lassen と不定動詞で意味的にひとつの単位をなし、〈ある事柄を直接引き起こす〉ということをあらわす。この表現については次の1.2.でもう一度詳しく扱う。

- (9) (……) *läßt* er, um einem beschwichtigenden Pfeifchen Feuer zu geben, sein gutes altes Feuerzeug *springen*. (S. 987)

1.1.5. 「原因」

ここでは、ある「こと」が原因となって、不定動詞にあらわされている事柄が引き起こされる、生起することが表現される。〈ある「こと」がまた別のある「こと」をひき起こす〉ことをあらわす。

- (10) Der Anblick der gewürfelten Gebein *läßt* sein Gesicht zur Augenwurzel hin *schrumpfen*. (S. 693)

これらの意味解釈のカテゴリーは決して絶対的なものでなく、他の可能性が排除されるわけではない。lassen の「意味」および lassen 文の「意味解釈」にとって重要なことは、これらの「意味解釈」はコンテキストがあって初めて判明する相対的なものであり、lassen そのものの「意味」、「意味機能」とは別のレベルにあることである。これらの「意味解釈」を包括するような抽象的な lassen の「意味」、「意味機能」は、〈ある事柄と lassen の主語の間に何らかの因果関係が存在することをあらわす〉、ということで、「放置」、「許可」、「使役」、「原因」といった意味解釈はこの〈ある事柄と lassen の主語の間の何らかの因果関係〉の具体的な形と考えられる。現代語の lassen にとって重要な点は、まさにこの〈因果関係をあらわす〉という抽象性である。どんな意味解釈がそもそも可能であるかという点は現代語の lassen にとってはそう本質的なことでないように思われる。

1.2. 「Kausativ 体系」における lassen

ある事柄がある別の事柄の生起・存続のきっかけ、原因となっていることをあらわす表現全体を「Kausativ 体系」と考えた場合、lassen もその中に含まれる。しかし lassen は原則的には「間接的作用」、すなわち「間接的」に（例えば第三者を通じて）不定動詞にあらわされている事柄を引き起こすことをあらわす、という点に特徴が見られる。先にあげた「放置」、「許可」、「使役」の意味解釈においても、不定動詞にあらわされている事柄の担い手は lassen の主語とは別であり、lassen の主語から事柄への作用は〈何もしない〉、〈口頭で許可・命令する〉など「間接的」なものである。また「原因」の意味解釈においても lassen の主語が物理的に「直接的作用」を及ぼしているわけではない。

しかしその一方で「惹起」のような例がある。(9)における *springen lassen* では、〈ライターがひとりでに飛び上がるのを妨げない〉ということが意味されているわけではなく、〈跳びはねるようにライターを取り出す〉という「直接的作用」があらわされ、不定動詞は作用の様態を詳しく説明している。ここでは *springen lassen* がひとつの意味的単位で、Feuerzeug がその目的語と考えられる。lassen+不定動詞がこのように「直接的作用」をあ

らわす条件は、次の例に示すように、ある事柄の生起をあらわす「自動詞」に対応して、ある事柄を引き起こすことをあらわす「他動詞」が存在して然るべきなのに、そのような「他動詞」が存在しない場合、また存在しても意味的に対応していない場合⁵⁾である。そのとき *lassen* + 不定動詞は「他動詞」と同じ役割を果たす⁶⁾。

(11) a. Das Faß *rollt*.

b. Er *rollt* das Faß.

このようなパターンの対応関係は例えば *knallen* には存在しない。なお例文左上の星印はその文が文法的に非文であることを示す。

(12) a. Die Peitsche *knallt*.

b. *Er *knallt* die Peitsche.

このような場合 *knallen lassen* が「他動詞」と同じ役割を果たしていると考えられる。

(12) c. Er *läßt* die Peitsche *knallen*.

このような「惹起」の例としては他に以下のようなものがあげられる。

(13) Sie konnte Näseln, Zirpen und gleichzeitig die hellrote Zunge in dunkelroter Mundhöhle *flattern lassen*. (S. 682)

(14) Aber der kujiehnende Hund *läßt* die Steilohren *kippen*, (S. 954)

(15) und Harry *ließ* zwei leere Fahrscheinblöcke in die Tasche *gleiten*. (S. 930)

「間接的作用」をあらわす Kausativ の助動詞が「直接的作用」をあらわし「他動詞」と同様な役割を果たすという現象は日本語にもみられる。「させる」という、いわゆる使役の助動詞を用いるが、ここでは第三者を通じて何かを引き起こした、ということがあらわされているのではなく、使役の助動詞と本動詞でひとつの単位をなし、「他動詞」と同じ働きをしている⁷⁾。なお例文左横の疑問符は、筆者の語感では、その文の文法性が疑わしいことを意味する。

(16) 堤防が決壊する。

(16a) ? 台風 3 号がその堤防を決壊した。

(16b) 台風 3 号がその堤防を決壊させた。

(17) 車が移動する。

(17a) ? レッカー車はその車を移動した。

(17b) レッカー車はその車を移動させた。

上にあげたような場合以外 *lassen* は「間接的作用」をあらわすわけであるが、「放置」、「許可」、「使役」といった意味解釈は、コンテキストがあって初めて判明する「間接性の度合い」と考えられる。「Kausativ 体系」における *lassen* の役割で重要な点は *lassen* が基本的には「間接的作用」のシグナルとなっていて、コンテキストが与えられて初めて判明する「許可」か「使役」かといった意味解釈は別のレベルにあることである。

2. 中高語 *lassen* 文における意味解釈

2.1. 意味解釈分類基準

現代語 *lassen* に関しては、*lassen* の主語と不定動詞であらわされる事柄の間の時間的關係、意思的關係にもとづいて意味解釈をグループ分けしたが、中高語にそのままこの基準を

適用するのは問題がある。現代語の語感からすると、lassen は最も一般的かつ包括的な使役の助動詞であり、lassen 文の意味解釈分類は、この一般的かつ包括的な機能を、コンテキストにおけるメルクマールに基づいて分類したものであった。中高語の lâzen が現代語 lassen と同様に、一般的かつ包括的な使役の助動詞であると言えるかどうかは分析してみなければならない。また lâzen とともに用いられている動詞をとってみても、たとえ現代語 lassen と共に用いられている動詞と同じであっても、それは形が同じというだけにすぎず、その動詞の意味までが同じであるかは分析してみる必要がある。lassen と共に用いられる動詞に bleiben があるが、lâzen も beliben とともに用いられる。現代語の bleiben は「状態」を表す動詞と呼べるであろうが、だからと言って中高語の beliben も「状態」を表す動詞としてしまうのは問題である。中高語 lâzen の用いられ方の分析については、lâzen のみならず、それと共に用いられる動詞の意味分析も同時になされなければならないであろう。こうした分析から得られる結果がたとえ現代語の場合と同じになるとしても、このステップは踏まなければならない。

したがって、ここでは lâzen と共に用いられる動詞を、他の用法も考慮してその特徴付けを行った後、lâzen とその動詞の結び付いた用例がコンテキストの中でどのような意味解釈がなされるか、lâzen と用いられる動詞の意味特徴と lâzen 文の意味解釈の間に相關関係がみられるか、という点から考察を加えて行く。すなわち、lâzen が不定動詞とともに用いられている例が分析対象であるが、それらの不定動詞がそもそもどのような用いられ方をする動詞であるか、という点が第一の問題点である。具体的な分析の手掛かりとして、不定動詞の主語に相当するものに「もの」、「こと」、「ひと」のどれが来るか、どのような法で用いられるか、などがあげられる。この動詞の主語が「もの」、「こと」、「ひと」のどれであるかという観点はあくまでもより客観的な手掛かりとして利用するものであって、この手掛かりが妥当であったか否かについては後に議論する。

このような観点から用例を見た場合、不定動詞の主語に相当するものには1)「もの」または「こと」のみ、2)「もの」、「こと」および「ひと」、3)「ひと」のみの3つのグループが考えられ、実際にその3つのグループが観察される。

2.1.1. 不定動詞の主語が「もの」、「こと」のみの動詞

このグループには次のような動詞が観察される。なお用例は原則として『Das Nibelungenlied』からであるが、テキストの用例が少ない場合などベーネッケの辞書も参考にする。

ahten, belangen, erbarmen, ergân, gelingen, geschehen, gezemen, unbilden

以下これらの動詞の用法について詳しく検討して行く。最初に lâzen とともに用いられた例を示し、次にそれ以外の用例を示す。

ahten:

(18) <Daz lât iuch ahten ringe>, sprach dô Sîvrit, (159, 1)

この用例で、不定動詞 ahten の目的語にあたるものは iuch で、主語にあたるものは daz で

あり、この *daz* は前に出て来た事柄全体（ここではザクセン人がブルグンド王国に攻めてこようとしていること）を受けている。したがって不定動詞の主語は「こと」と言うことができる⁸⁾。*lâzen* を伴わない場合の *ahten* の用例には次のようなものが観察される。

(19) *ez ahtet mich vil ringe, swaz si weinens getuot.* (1001, 4)

(20) *Hagenen ahtet' ringe, gevidelte er nimmer mër.* (1961, 1)

(19)では、*ahten* の主語は *swaz* 以下を受けており、また(20)でも *gevidelte* 以下の内容が主語となっている。*ahten* には「ひと」を主語にして “Acht geben, überlegen, aussinnen” という意味をあらわす用法も存在するが、「こと」を主語とし「ひと」を目的語にとる場合の意味は “gelten, kümmern” で異なる。『Das Nibelungenlied』の中では *ahten* の用例は全部で4つあり、うちひとつが「ひと」を主語としたものである。

belangen :

(21) <Des *enlât iuch niht belangen*>, sprach der Wolfhart (2269, 1)

belangen の用例はこれ1例のみであった。この動詞は「ひと」の4格と「もの」、「こと」の2格をとる非人称動詞で、不定動詞の意味上の主語は存在しない。しかし *ahten* の場合と同様、動詞のあらわす、いわば「心的状態」の担い手となっている人間が4格であらわされている点は共通している上、*ahten* における1格の「もの」、「こと」と、4格の「ひと」との関係は、*belangen* における2格の「もの」、「こと」と4格の「ひと」との関係と同様であるためここに加えた。ベーネッケの辞書では次のような例があげられている。

(22) *die fürsten belanget sêre — si saehen gerne wîp und kint.* (Karl. 42. b.)

erbarmen :

(23) *nu lâ dich erbarmen unser beider sêr,* (2126, 2)

ここでは *dich* は *erbarmen* の目的語であり、*erbarmen* の主語は *unser beider sêr* である。この動詞の用例はその他に4例あるが、過去形で用いられたものがひとつであとは *müezen*, *mügen* とともに用いられている例ばかりで、直接法で用いられたものは見られなかった。

(24) *ja erbarmte im diu gâbe, die der helt guot*

bî sînen lesten zîten sô nâhen het getân. (2198, 1-2)

(25) *Nu müeze got erbarmen deich ie gewann den sun,* (995, 1)

(24)で *erbarmen* の主語は *diu gâbe* であり、(25)では *deich* 以下である。その他の例においても前出の事柄の内容を受ける *ez* である。ベーネッケでは「ひと」が1格になり、「こと」、「もの」を2格ないしは前置詞句であらわす再帰動詞としての用法も記載されているが、そのような例はここでは見られなかった。またベーネッケの用例の中でも、再帰動詞の例はわずかである。

ergân :

(26) *Swaz uns geschehen künne, daz lât kurzliche ergân.* (2097, 1)

ここで *ergân* の主語に相当するものは *daz* で、これは *swaz* に導かれる副文の事柄を受けている。*ergân* の用例は全部で38であるが、直接法で用いられているものはわずか6例で、そ

れ以外は、話法の助動詞 *mügen*, *sullen*, *künnen* とともに用いられているか、または接続法である。ergân の主語は次の例に見られるように、前出または後出の事柄全体を受ける *ez*, *daz* の他 *diu hovereise*, *diu reise*, *mîn vart*, *solch wer*, *diu hîrât*, *meinraete*, *ir gruo*z, *schade*, *der jâmer* のような名詞である。

- (27) Er dâht' in sînem muote: <wie kunde *daz ergân*,
daz ich dich minnen solde? *daz ist ein tumber wân.* (285, 1-2)
 (28) *ez möhte noch diu reise in diz lant ergân,* (1093, 2)
 (29) *wie iu zuo den Hiunen disiu hovereise ergât.* (1535, 4)
 (30) *mir ist liep ûf mîne triuwe, daz ie diu hîrât ergie* (2174, 4)

これらの名詞はやはりある「こと」をあらわすものである。そしてこの「こと」のあらわし方に関しては、*ez*, *daz* によって前出または後出の事柄が受けるか、事柄を名詞句にしてあらわすか、というふたつの方法が存在している。

geschehen:

(31) *Lât mir nâch minem leide daz kleine liep geschehen.* (1068, 1)
geschehen の頻度はかなり高く全体で139例ある。うち *geschehen lâzen* は全部で5例であった。直接法、接続法ともに見られるが、直接法の場合には過去時制で用いられているものが多い。直接法現在の場合は、主語に *swaz* の来る例が多く、意味からすれば未来のことをあらわしている。話法の助動詞は *müezen*, *künnen*, *sullen*, *mügen* が観察された。*geschehen* の主語にあたるものは、事柄全体をうける *ez*, *daz*, *waz*, *swaz* が最も多いが、*diu nôt*, *der grôze mort*, *diu ritterschaft*, *daz spil*, *strît*, *grôz ungemach*, *heinlicher dinge*, *daz schaden*, *sorgen*, *der eit*, *maere* などが見られ、また副詞とも名詞とも区別できないもので *liep*, *leit*, *leider*, *wol*, *sanfte*, *rechte*, *übele* などが観察される。

- (32) *Z'einem sunewenden der grôze mort geschach,* (2086, 1)
 (33) *sô ist ouch mir unmaere, swaz im darumbe geschiht.* (1771, 4)
 (34) Er gedâht' ouch manege zîte: <wie sol *daz geschehen*,
daz ich die maget edele mit ougen müge sehen? (136, 1-2)
 (35) *wande vor in beiden diu ritterschaft geschach.* (1879, 3)
 (36) *dâ von im sît vil liebe und ouch vil leide geschach.* (138, 4)

『Das Nibelungenlied』の用例に関しては、このように *geschehen* の主語は事柄、すなわち「こと」である。ergân の場合と同様、事柄の表し方に関して、*ez*, *daz* で事柄全体を受けたり、名詞句で表現したり、という差異が見られる。

gezemen:

(37) *die suone mînes herren möht ir iu lâzen gezemen.* (2342, 4)
gezemen は全体で27例観察されたが、うち21例は直接法過去、2例は接続法、1例は直接法現在で用いられている。その他 *müezen*, *sullen* と共に用いられた例がそれぞれひとつずつある。

- (38) *daz versagete er niemen: ez muoze in allen gezemen.* (1692, 4)

(39) Sifrit der helde balde urloup genam

von vroun Prünhilde, als im *daz* wol *gezam*, (541, 1-2)

gezemen の主語にあたるものは、事柄をうける *ez*, *daz*, *swaz* の他、*weinen*, *triuten*, *kleider*, *vride staete*, *die suone* の名詞が観察された。*kleider* という具体的な「もの」の例がひとつあるが、その他はすべて事柄全体を受ける「こと」である。

unbilden :

(40) Des antwurte Hagene: <*lāt* iuch *unbilden* niht

mīne rede dar umbe, *swie halt iu geschihit* (1471, 1-2)

unbilden はこの 1 例しか見られなかったが、ベーネッケの用例では、「ひと」を 1 格にとる用例が 1 例のみで、“*handle auf eine ungemäße weise*” とされ、それ以外にある 4 例は「ひと」の 4 格をとり *mich dünkt ungemäß*” という意味である。

(41) von diu *unbilde* niemen ob wir von den gereden kunden (Benecke, Servat. 34)

以上、不定動詞の主語に相当するものが「もの」、「こと」である動詞を挙げたが、これらの動詞の中でも、「もの」、「こと」の他に 3 格ないしは 4 格の「ひと」を常にとる動詞とそうでないものが存在する。前者は *ahten*, *belangen*, *erbarmen*, *unbilden*, *gezemen* などで「もの」、「こと」の 1 格ないし 2 格をとり、常に「ひと」の 3 格ないし 4 格をとる。一方後者には *ergān*, *geschehen* が該当する。このふたつの動詞は「こと」の 1 格は常にとるが、「ひと」の 3 格はとったりとらなかったりする。

また *lāzen* との使われ方に関しても多少の差異がある。*ahten* など、常に「ひと」の 4 格ないしは 3 格をとる動詞とともに用いられる *lāzen* には直接法で用いられている例が存在しない。命令形が接続法、または *mügen* の接続法とともに用いられている。これに対して *ergān*, *geschehen* では命令形で用いられている例がほとんどではあるが、直接法で用いられている例もそれぞれひとつずつ存在する。

動詞の意味を検討してみても、両者の間には差異が見られる。レクサーの辞書記載の意味は次の通りである。

ahten : mir gilt, mich kümmert

belangen : lang dünken, langweilig sein

erbarmen : erbarmen haben

gezemen : angemessen finden

unbilden : unrecht oder unschicklichkeit dünken

人間の行動に関する動詞には違いないが、これらの事柄の担い手である人間が「能動的」、「行為者」であるかという点から検討してみた場合、そのようには言い難いであろう。*lāzen* とともに用いられた用例は観察されないものの、これらの動詞と同様な意味的・統語的構造（「もの」、「こと」の 1 格ないし 2 格と「ひと」の 3 格ないしは 4 格）を有する動詞としては *müējen*, *riuwen*, *gewerren*, *beswaeren*, *betrüeben*, *wundern* のようなものがあげられる。

(42) *daz müet* mich *âne māze* : *ichn kans niht an gesehen mēr*. (2216, 4)

(43) <*so möhte* uns balde *riuwen* *disiu hovevart*. (1924, 2)

- (44) sone mac iu niht *gewerren* der argen Kriemhilde muot.> (1472, 4)
 (45) ob ungefüegiu vräge danne dā geschiht,
 daz *betriebet* lichte recken ir muot. (2240, 2-3)
 (46) swie niht dar umbe redete der fürsten vil gemeit,
 ez *betruobete* im sin herze und *beswarte* im den muot. (1919, 2-3)
 (47) <Mich *wundert* dirre maere>, sprach der küene zehant, (106, 1)

これらの動詞においても事柄の担い手である人間は「能動的」、「行為者」とは言い難い。むしろ「ある事柄が原因となって当該の人間にある自発的な動きが生じる」、又は「ある事柄が当該の人間の心的な状態の原因になっている」と言うべき性格のものである。これらの動詞が命令形で用いられることがないこと、話法の助動詞 *wellen* と共に用いられることがないことからしても、「能動性」、「行為性」のないことが確認される。これらの動詞は人間の意味ではコントロールできないような「心的な動き・状態」をあらわすものと特徴づけられよう。その意味では、3格ないしは4格であらわされる人間は「受動的」である。

achten などの動詞とともに用いられた *lâzen* のほとんどが命令形で用いられているわけであるが、その命令形はある「行為の遂行」を意味するような命令ではない。むしろ「～であれ」という願望のような意味になっている。

これに対して *ergân*, *geschehen* の場合は人間が直接表現されてはいないものの、主語が受ける事柄や名詞は人間の「行為」と呼び得るものであり命令形でも「行為の遂行」を意味する命令と解釈できる。このことは次の2例を比べて見た場合に顕著である。

- (48) Si sprach: <welt ir mir triuwe leisten, herre mîn,
 sô sult ir boten senden ze Wormez über Rîn.
 so enbiute ich mînen friunden des ich dā habe muot,
 sô kumt uns her ze lande vil manec edel ritter guot.> (1405)
 Er sprach: <*swenne ir gebietet*, sô *lâzet ez geschehen*. (1406, 1)
 (49) *ich tuon swaz ir gebietet*, daz ir mich *lâzet genesen*.> (500, 4)

geschehen lâzen の場合には実際に「行為」を遂行するのは話し手であるかどうかは不明であるが、ここで生じる事柄は *boten senden* であり「行為の遂行」が可能である。

以上のような理由により *ergân*, *geschehen* に関しては、このふたつの動詞がそもそもどんな動詞であるか、そして *lâzen* 文の意味解釈とどんな関係があるのか、という観点からもう少し詳しく検討してみる必要がある。以下まずは統語的な特徴に基づき、「ひと」の3格を伴う場合とそうでない場合とに分けて分析する。

2.1.1.1. 「ひと」の3格を伴う *ergân*

「ひと」の3格を伴う場合には *leide*, *schedeliche* などの副詞を伴う場合が多いのが特徴的である⁹⁾。

- (50) daz uns durch ir raete iemen schaden tuo.
 hât aber si den willen, ez mac *ir leide ergân*. (1482, 2-3)
 (51) Ich sluoc den selben vergen hiute morgen fruo.
 si wizzen wol diu maere nu grifet balde zuo!

ob Gelpfrât und Else hiute hie bestê
 unser ingesinde, daz iz *in schedelîch ergê*. (1582)

また *swie* に導かれる場合もある。

(52) so erwerben wir die vrouwen, *swie ez uns dar nâch ergê*. (341, 4)

3格であらわされている「ひと」と1格であらわされている「こと」の関係を見た場合、3格の「ひと」が「内的な動き・状態」の担い手であるか否かは、必ずしも明確ではない。このような場合に登場する副詞は *leide*, *liebe* などがほとんどであるが、これらの副詞の場合は, *jm leide tuon* のような表現も存在し, 次のような対応関係が見られる。

(53) *ez mac ir leide ergân* (1482, 3)

(54) *daz uns taete leit*/ Hagen von Tronege (1607, 2-3)

したがってある事柄が原因となって内的な動き・状態が生じるだけではなく, 何者かが直接被害を加えるというような場合も十分考えられ, *ahten* などの動詞とは少々異なる。実際にはある「行為」の被害を被ったのであっても, 表現は一少なくとも現代語の感覚からすれば一自然にあることが生じたようなものであるとも考えられる。そのような場合は, 実際には可能な人間の直接の関与を切り捨てた表現と言えよう。

2.1.1.2. 「ひと」の3格を伴わない *ergân*

「ひと」の3格を伴わない *ergân* では, 主語には事柄全体を受ける *daz*, *ez* が圧倒的に多い。

(55) *und wurden des ze râte, wie daz sold' ergân,*

daz man ez verhaele, daz ez hete Hagene getân. (999, 3-4)

ここでは *ergân* の主語となる *daz* は次の行の *daz* 以下を受けていて, その核になる動詞は *verheln* である。現代語の感覚からすれば, わざわざ *ergân* を用いなくとも, *wie man es verhehlen soll* のように動詞そのもので表現するであろうから, この中高語の文は冗長な感じがする。このように事柄全体を *daz* などで受けて *ergân* を用いる表現で, その事柄の中核になる動詞は何かという観点から用例を検討してみると, 現代語の *es* のように漠然とした内容を受けているものも多少はあるが, ほとんどは「行為」をあらわす動詞を含む事柄を受けている。

(56) *dô begonden Kriemhilt ir mâge biten,*

daz si bî ir muoter solde dâ bestân

dô sprach diu vrouwe hêre: <daz kunde niemêr ergân. (1077, 2-4)

(57) *sô nemt die selben vrouwen; der starke Sifrit was ir man*

Dô sprach der künig rîche: <wie möhte daz ergân, (1144, 4~1145, 1)

daz が受けている事柄の中核となる動詞は(56)では *bî ir muoter bestân* であり(57)では *die selben vrouwen nemen* である。これらの動詞は話法の助動詞 *wellen* と問題なく用いられ, また「行為の遂行」の意味の命令形でも用いられる。*ergân* という動詞のみを見れば <ある事柄が起こる> という表現であるが, その場合の事柄の多くは人間の「行為」である。*ergân* の主語に来る名詞も *diu reise*, *mîn vart*, *diu hîrât* などやはり人間の「行為」をあらわすものである。したがって *ergân* は <「行為」を直接動詞的に表現しない言い回し> と特

徴づけられよう。

ergân という動詞そのものは「出来事」を表現すると言えるであろうが、実際には「行為」をあらわしていることが多い。このことより、中高語では、〈「行為」を「出来事」としてとらえている〉、もしくは〈「行為」と「出来事」の区別をしない〉と断定するのは早計であろう。ここで「行為」が「出来事」として〈とらえられている〉というのはすでに問題である。中高語では「行為」でありながら、「出来事」をあらわす時のような言い方で表現しているだけであって、これを即世界のとらえかた、見方に結び付けてしまう根拠はない。注目すべきなのは「行為」を動詞的に表現していないという表現パターンであり、「行為」を動詞的に前面に出さないという点で、行為表現が優勢な現代語の感覚からすれば、中高語の表現は「遠回し」な表現と言えるであろう。

2.1.1.3. 「ひと」の3格を伴う *geschehen*

geschehen も *ergân* と同様に、「ひと」の3格を伴う場合とそうでない場合がある。「ひと」の3格を伴う場合は、やはり *ergân* と同様、*leide*, *herzeleide*, *liep*, *rehte*, *wol*, *übele*, *sorgen*, *êren*, *ze schaden*, *sanfte* とともに用いられている場合がほとんどである¹⁰⁾。

(58) *sus gewan er Prünhilde; dâ von im leide geschach.* (338, 4)

(59) *wie gehabt sich Sifrit, von dem mir liebes vil geschach?* (769, 4)

(60) *Dô sprach der Bernaere; <vil rehte ist iu geschehen,* (2312, 1)

逆に「ひと」の3格で、*leide* などの語句を伴わない用例には次のようなものが見られる。

(61) *er wolde si ergetzen, swaz ir ie geschach.* (1255, 3)

(62) *Dô kom diu künneginne unde het iz ouch gesehen,*

daz von des heldes zorne dem Hiunen was geschehen. (2147, 2)

daz, *swaz* などが主語となっているが、これらの語句はコンテキストの中で *leide*, *schaden* などと置き換えが可能なように思われる。また *daz*, *swaz* は他の動詞の目的語になっている場合ばかりで、前出の事柄を受けていない。この点 *ergân* とは少々異なっている。次の *ergân* と *geschehen* を比較した場合、

(63) ……*daz si sô manigen man*

in ir dienst gewunne, daz ez in leide müez' ergân. (1128, 4)

(64) *dâ von vil manigem degene sît wênic liebes geschach.* (1413, 4)

ergân の主語になっているものは、前出の事柄を受ける *ez* であり、生起する事柄は *daz* ……*gewunne* であらわされている。これに対して *geschehen* の場合、主語は *wênic liebes* で、生起するのはこの *wênic liebes* であり、その「原因」となる事柄は *dâ von* によりあらわされている。*ergân* の場合には〈ある事柄（行為）が生じる〉というのが中心にあり、それに「受益／被害者」が付加されたりされなかったりする、という表現であるが、*geschehen* の場合には、〈あるひとに「被害」または「利益」が生じる〉というのが中心にあり、それにその「原因」となる事柄が付加されたりされなかったりする、という表現で、両者の間では表現の中心が多少ずれている。*geschehen* の方が、ある事柄の及ぼした影響 (*leide*, *lieb* など) とその「利益／被害者」にウェイトのある表現と言えよう¹¹⁾。

2.1.1.4. 「ひと」の3格を伴わない *geschehen*

一方「ひと」の3格を伴わない *geschehen* の用例も多い。その場合の主語は前出の事柄を受ける *daz*, *ez* や *strit*, *diu reise*, *schaden*, *spil* などの名詞で、「ひと」の3格を伴う場合に典型的に見られた *leit* などは見られない。「ひと」の3格を伴う場合は、生起するものは *leit* などで、ある別の事柄を「原因」とする「結果」と言えるが、「ひと」の3格を伴わない場合には、事柄そのものが生起したことがあらわされる。その事柄は *strit*, *diu reise* などのように名詞句によって表現される場合もあれば、事柄全体を受ける *daz*, *ez* によって表現される場合もある。

(65) *Inre zwelf wochen diu reise muoz gescehen.* (145, 1)

(66) *Vor einer versperzite huop sich grôz ungemach,*
daz von manigem recken ûf dem hove geschach. (814, 1-2)

(67) *ein gruoz sô rehte schoene von kûnege nie mêr geschach.* (1808, 4)

(68) *Diu liute nam des wunder, wâ von daz geschach,*
daz man die kûneginne alsô gescheiden sach, (834, 1-2)

(69) *Dô sprach aber Wârbelin: <unt môhte daz geschehen,*
daz wir mîne frouwen kônden ê gesehen, (1451, 1-3)

(70) *ich wil nâch Kriemhilde rîten an den Rîn.*
diu sol hie zen Hiunen gewaltet kûnneginne sîn. (1169, 3-4)

》*Daz wolde got* 《, sprach Gotelint, 》*und môhte daz geschehen!* (1170, 1)

(68), (69)では、*daz* が後に出てくる事柄を先取りして受け、(70)では前に出てきた事柄を受けている。(68)で *daz* の受ける事柄は、ブリュンヒルトとクリームヒルトが離れて歩いていることで、(69)では、ウオテに会うこと、(70)ではクリームヒルトがエッツェルの后になることである。生起する事柄は多くの場合「行為」と言える性質のものである。その意味では *ergân* の場合と同様 *geschehen* でも「行為」が表現の前面に出ていない。これは日本語で「今度結婚することになりました。」「今度留学することになりました」というような表現と似ていて興味深い。これらの表現においては、ある事柄が偶然自分の意思とは関係なしに起こった、ということの意味しているわけではなく、自分の意思で行う「行為」のことが意味されている。「行為」を動詞的に「今度結婚します。」「今度留学します。」と言うこともできるが、ある「行為」を報告するような時には普通は使わない。この「なる」的な表現と「する」的な表現で意味されている内容は同じであるが¹²⁾、それぞれの表現から受ける印象又はニュアンスはかなり異なる。「する」的な表現の方がどこかずうずうしい感じがする。「行為」を直接動詞的に表現する現代ドイツ語の感覚からすれば、日本語の「なる」的な「行為」表現をそのまま直訳すればドイツ語では使わない表現になり、逆に「する」的な表現を用いるのが普通である。また中高語の *geschehen* による「行為」表現もまわりくどく感じられるであろう。やはりここでも、中高語では「行為」が「出来事」としてとらえられていた、というよりは、(少なくとも現代語の語感からすれば)「行為」なのに「出来事的」に表現されていた、と考えるべきであろう。このことは次の例によりはっきりする。

(71) *Si sprach: 《welt ir mir triuwe leisten, herre mîn,*
sô sult ir boten senden ze Wormez über Rîn.

so enbiute ich mînen friunden des ich dâ habe muot,
sô kumt uns her ze lande vil manec edel ritter guot.》(1405)

Er sprach: *《swenne ir gebietet, sô lâzet ez geschehen.》* (1406, 1)

(72) *Wir tuon swaz ir gebietet》, sprach dō Wärbelin.* (1413, 1)

(71), (72)の下線部を比較した場合、内容は同じであるが、表現上(72)では「行為」が動詞的に前面に出ているが、(71)では出ていない。geschehen も ergân と同様「行為」を直接動詞的に表現しない言い回しと特徴づけられるであろう。その意味においては「婉曲」な表現と言えよう。

このように「行為」でありながらそれを動詞的に前面に出さない geschehen, ergân とともに用いられた lâzen 文の意味解釈は、achten など「内的な動き・状態」をあらわす動詞とともに用いられた「～であれ」という lâzen 文の意味解釈ではなく「許可する」といったような意味解釈になる。geschehen や ergân では「行為」の担い手は直接表現されず、コンテキストの中から読み取らなければならない。命令形で用いられた場合、「～であれ」と言う解釈ではなく、daz などが受けている「行為の遂行」の「命令」または「許可」と解釈できる。今「許可する」という意味解釈を出したが、現代語の感覚からすると、「命令する」という強い「使役」の意味解釈はできないのか、という疑問が出てくる。事柄の性質からしても geschehen が実際意味しているのは「行為」であり、「使役」の意味解釈ができてもおかしくないように思われる。例えば次のふたつの文を比較してみる。

(73) Er sprach: *《swenne ir gebietet, sô lâzet ez geschehen.》* (1406, 1)

(74) *《unt senftet iuwerem muote. tuot, des ich iuch bit :》* (159, 2)

ここでは両方ともある「行為の遂行」を意味している。lâzet geschehen と言うか、「行為」をあらわす動詞の命令形を用いるかで両者の間にニュアンスの差があるかどうかは、中高語の語感がわからない今では判断が難しい。しかし両方の表現が意図していることは同じで、ある「行為の遂行」が達成されることである。したがって両者の差は言い回しの差ではないかとも考えられる。例えば現代語でもある「行為の遂行」が達成されるよう依頼する表現にはいくつかのヴァリエーションが存在する。

(75) Du tust, was ich dir sage.

(76) Tu, was ich dir sage.

(77) Kannst du tun, was ich dir sage?

(78) Könntest du tun, was ich dir sage?

どの表現においても相手が自分の頼んだことを遂行することを意図している。これらの表現の間の差は、「依頼」の「丁寧さ」に求められる。(75)がもっとも強く「依頼」というよりは有無を言わせぬ「命令」であり、その度合いは(78)が最も弱く、まさに丁寧な「依頼」になる。これと同様なことが「行為」を前面に出さない geschehen による「行為」表現にも見られたのではないかと考えられないであろうか。直接動詞的に命令するかわりに geschehen lâzen の命令形を用いるが、意味するところはある「行為の遂行」で、このような表現の使用頻度がかかなり高く、「婉曲性」が次第に意識されなくなり、「行為の遂行」を強くあらわす表現へと移行したと考えられないだろうか。中高語 lâzen は現代語の lassen と較べても、命令形で用いられている例が圧倒的に多い。ここで用いている『Das Nibelun-

genlied』の中でも用例の38%は命令形である¹³⁾。

作業仮説として不定動詞の主語に相当するものが「ひと」、「もの」、「こと」のどれであるかを最初の手掛かりとして、不定動詞の意味特徴と *lâzen* 文の意味解釈の関係を検討してきたが、これまでの考察より *lâzen* 文の意味解釈にとって重要なのは、不定動詞の意味特徴で、特に「内的な動き・状態」をあらわすような動詞とともに用いられる *lâzen* はほとんどすべてが命令形で用いられ、「行為の遂行」を意味する命令とはならず、むしろ「～であれ」という意味解釈になった。動詞の1格または2格は「こと」、「もの」でなく、「ひと」でもこのような動詞は存在する。その場合1格ないし2格の「ひと」は「行為者」として何かを引き起こすのではなく、むしろその「存在」、「人となり」、「行動全体」が問題になっていると考えられる。動詞があらわす事柄の担い手は1格または2格ではなく、3格ないしは4格であらわされる「ひと」である。その「ひと」もやはり「行為者」というわけではなく、「内的な動き・状態」に〈見舞われる〉人間である。その意味では「受動的」である。このような動詞には *behagen*, *bevolhen* *sîn* が挙げられる。

(79) *si muoz im durch ir schoene von grôzen schulden wol behagen.* (632. 4)

(80) *uns suln dîne liute vil wol bevolhen wesen ;* (2165, 3)

behagen の主語には「ひと」のほか「もの」、「こと」の場合もある。(79)における「ひと」の主語も *durch ir schoene* という語句が示すとおり、「ひと」の「行為」が問題となっているわけではなく、その容貌が問題となっている。(80)でも同様に *diu liute* の「存在」、「状態」といったものが問題となる。*behagen*, *bevolhen* *sîn* も *ahten* などのグループに属するとするのが妥当であろう。これらの動詞によってあらわされる事柄には、〈人間の意思によって左右し得るようなものではない〉、という点が共通している。なぜなら、これらの動詞は話法の助動詞 *wellen* とともに用いられることも、「行為の遂行」を意味する命令形で用いられることもないからである。

2.1.2. 不定動詞の主語が「ひと」および「もの」、「こと」である動詞

前の章では動詞にふたつのグループがみられた。一方は人間の意思ではコントロールできないような事柄をあらわすもので、もうひとつは *geschehen*, *ergân* のように「行為」を動詞的に前面に出さない「遠回しな行為表現」で、*lâzen* 文の意味解釈もそれぞれのグループで異なっていた。この章で扱う、主語が「ひと」および「もの」、「こと」である動詞には「遠回し」な表現に共通する面をもつ。ここでは *beliben*, *sîn*, *stân* が問題となるが、これらの動詞とともに用いられた *lâzen* の用例は比較的多く全体の約18%を占める¹⁴⁾。

beliben :

(81) *Der künic sprach : 《lât beliben den mortlichen zorn.* (872, 1)

beliben の主語にあたる名詞にはこの他 *die rede*, *wât*, *die angst*, *diu herberge*, *den bûhurt*, *die bete*, *die klage* の名詞と事柄全体を受ける *daz*, *ez* が観察された。また *beliben* の主語にあたる名詞が「ひと」の例としては次のようなものが挙げられる。

(82) *Gunthern er lie beliben und lief Gêrnôten an ;* (2043, 1)

lâzen とともに用いられていない場合、*beliben* の主語はほとんどの場合「ひと」である。

「ひと」以外では、事柄全体を受ける *ez* と *golt* それぞれひとつのみである。

(83) *sô muoz ouch hie belîben daz Sifrides golt.* (1272, 2)

(84) *ez mag alsô belîben unz an ir beider tôt,
daz wir gerîten nimmer in Etzelen lant* (1211, 2-3)

lâzen とともに用いられた場合、不定動詞の主語に相当するものが「もの」、「こと」の用例は17、「ひと」の用例は3であることを考えると、*lâzen* とともに用いられる *belîben* では主語が「もの」、「こと」である比率がかなり高いといえよう。すなわち「こと」、「もの」+ *belîben* という表現は *lâzen* とともに用いられる場合に際立って多く、「こと」、「もの」+ *belîben lâzen* でひとつの固定した言い回しを作っていると言える。*belîben lâzen* に関しては、*belîben* の主語に相当する名詞が抽象名詞、すなわち「こと」か、具体名詞、すなわち「もの」または「ひと」かで、意味解釈がはっきりと異なる。抽象名詞の場合には、ある「こと」を〈やめる〉という意味解釈になる。

(85) *Die rede si lie belîben. dô was er hin gegân,* (663, 1)

これに対し「もの」、「ひと」の場合は、〈ある「もの」、「ひと」をある場所においたままにする〉、すなわち〈残す〉、〈去る〉という意味解釈になる。

(86) *Gotelint diu schoene die herberge lie
hinter ir belîben.* (1305, 1-2)

(82) *daz si von Tronege Hagenen niht solden lân
belîben bi dem Rîne,* (1420, 2-3)

特に〈やめる〉という意味解釈の場合の不定動詞 *belîben* はむしろ冗長で、無くてもかまわないと考えられる。なぜなら実際に *belîben* がなくても〈やめる〉という意味解釈になっている用例が存在するからである。

(88) *daz du die rede lâzest durch mich mit gütlichen sîten* (822, 4)

belîben の主語に相当する名詞が *die rede* などのような「こと」の場合、*geschehen lâzen* と同様、「行為」を動詞的に前面に出さない「遠回し」な表現と共通している。現代語ならば *mit etw. aufhören* のような動詞によって表現するところであろう。もっとも *klage* や *weinen* が「行為」かどうかははっきり区別できないが。

sîn :

sîn も *belîben* の場合と同様に *sîn lân* で〈やめる〉という意味解釈になり、その際 *sîn* の主語に相当する名詞は事柄をあらわす抽象名詞である¹⁵⁾。

(89) *Dô sprach der herre Sigemunt: 《lât iuwer schimpfen sîn.* (1019, 1)

(90) *Er sprach zer küneginne: 《lât iuwer weinen sîn.* (1256, 1)

sîn の主語に相当する名詞にはこのほか、*iuwer jagen*, *ir unmuoze* が観察された。また *sîn* の主語に相当する名詞に具体物、人間が来る場合には〈残す〉、〈去る〉という意味解釈になる。

(91) *daz ir sult hie belîben durch den willen mîn,
und lât den künec Etzel dort bi Kriemhilde sîn.* (1466, 304)

(92) *《her künec, lât iuwer gābe hie ze lande sîn.* (1489, 2)

この *sin* がなくとも意味解釈は変わらず、*beliben* 同様 *sin* も冗長である。

- (93) 《*nu lâzet iuwer weinen, und gē wir an den wint*, (2226, 2)

stân :

stân も *sin*, *beliben* と同様に、動詞の主語に相当する名詞が事柄をあらわす抽象名詞の場合には〈やめる〉という意味解釈になる。

- (94) *Sie sprach in ir zûhten*: 《*nu lât die rede stân*. (1241, 1)

- (95) *Er sprach ze Ortwine*: 《*lât iuwer zûrnen stân*. (120, 1)

この名詞にはその他、事柄全体を受ける *ez*, *die Sifrides wunden* (ジークフリートの傷のことについて話すこと) という例が見られる。*stân* の主語に相当する名詞が具体的な「もの」や「ひと」の場合には〈そのままにしておく〉, 〈残す〉といった意味解釈になる。

- (96) *Dô sprach der herre Gêrnôt*: 《*diu ros lâzet stân*, (599, 1)

- (97) *Noch liezen si diu herren ûf dem hove stân*. (1760, 1)

(94) の例のように *die rede* には *die rede beliben/sin/stân* という例があり、このような場合の不定動詞の間には差はないと考えられる。そもそもこれらの不定動詞がなくても意味解釈は同じであることからして、これらの不定動詞にはあまり意味がない。*beliben*, *sin*, *stân* のみで用いられる際には主語は「ひと」の場合が圧倒的に多く、「こと」の場合は少ない。しかし *lâzen* と共に用いられる時には、これらの動詞の主語に相当する名詞に「こと」をあらわす抽象名詞が多くなる。このことは *beliben/sin/stân lâzen* が *geschehen* と同様、「行為」を動詞的に前面に出さない「遠回し」な表現であり、しかもそれがこの表現の重要な役割であることを示しているように思われる。

2.1.3. 不定動詞の主語が「ひと」のみの動詞

不定動詞の主語が「ひと」のみの動詞は、これまでと違いかなり多岐にわたる。

begraben, behalten, bestân, bewachen, bîten, dienen, engelten, erfüllen, errechen, erwerben, gân, geben, geleben, genesen, geniezen, geruowen, gesehen, hân, heben, hoeren, hüeten, kiesen, komen, leben, ligen, minnen, pflegen, râten, reden, rîten, sagen, sehen, slahen, scheiden, schouwen, tragen, varn, vernemen, volgen, wizen

これらの動詞の主語である「ひと」がどんな役割を果たしているか、という観点から、*lâzen* とともに用いられたもの以外も検討してみると、話法の助動詞 *wellen* とともに用いられている例のあるものとそうでないもの、また「行為の遂行」を意味する命令形で使われているものとそうでないものが見られる。*wellen* とともに用いられ、また「行為の遂行」を意味する命令形で用いられるような動詞における主語の「ひと」は「行為者」と呼べるであろう。一方そうでない動詞における主語の「ひと」は「行為者」というよりは、状態などの担い手くらいであろう。上にあげた動詞の中では、主語が「行為者」である「行為動詞」がほとんどで、後者のような動詞には *geleben, genesen, geniezen, leben* が該当する。例えば「行為」をあらわす動詞である *hüeten* を例にとってみると、以下の例にみられるような用法が存在する。

- (98) *Dô sprach der Künec Gunther*: 《*ich swuor ir einen eit*,

daz ich ir getaete nimmer mēre leit,
und wil es fürbas hūeten: si ist diu swester mīn.》(1131, 1-3)

(99) Er sprach: 《bruoder Dancwart, sô hūetet uns der tür. (1957, 1)

上の例より、主語の人間は意思をもってその「行為」を行うと解釈できるであろう。このような例は *geleben*, *genesen*, *geniezen*, *leben* には見られない。主語が同じ「ひと」であってもその果たす役割は *geleben* などの動詞とそれ以外の動詞との間では異なっている。*lāzen* 文の意味解釈もやはり両者の間では異なる。

(100) Gunther sprach ze dem wirt: 《got lāz' iuch wol *geleben*. (1819, 1)

(101) ich tuon, swaz ir gebietet, daz ir mich *lāzen genesen*. (500, 4)

(102) Und lāt sie des *geniezen*, daz si iuwer swester si. (997, 4)

(103) er'n hāt uns niht getân

niwan guot und êre; man sol in *leben lān*. (868, 2)

不定動詞の主語にあたる「ひと」が「行為者」でない場合の *lāzen* 文の意味解釈は「行為」の「許可」や「命令」といったものではなく、〈現存している状態を妨げない〉、〈そのままにしておく〉というものである。一方「行為」をあらわす動詞とともに用いられた *lāzen* 文の意味解釈は、現代語の *lassen* の用法からすれば「許可」か「使役」かのどちらかで、その決め手はコンテキストである。中高語の辞書では現代語にはある“*veranlassen*”という意味は記載されていない¹⁶⁾。だからと言ってこの意味は中高語の *lāzen* にはなかったと断定するのは本末転倒である。この“*veranlassen*”の意味(解釈)が中高語 *lāzen* には本当に存在しないのかを調べるのが第一であり、もしそうだとしたら、なぜ存在しないのか、どのようにしてこの意味が加わってきたのかを調べるのが第二の課題である。本稿ではこの点を *hei-zen* との関係で分析しようとするものである。したがって「行為」をあらわす動詞とともに用いられた *lāzen* 文の意味解釈はこの時点では保留としておく。

2.1.4. まとめ

さて2.1.1.から不定動詞の主語に相当する名詞が「ひと」、「もの」、「こと」のどれであるか、という観点を手掛かりとして用例を分類し、そのそれぞれの中で、その動詞の他の文脈での使われ方も考慮して、特にその主語の果たす(意味的)役割に基づき下位分類をしてきた。主語が「ひと」、「もの」、「こと」のどれであるかという観点は、比較的客観的に判断がつくために用いた作業仮説であり、実際「ひと」、「もの」、「こと」という区別のみでは *lāzen* 文の意味解釈にとっての決め手とはならなかった。*lāzen* 文の意味解釈にとって重要な要素は、他のコンテキストなどより分析して抽出した、動詞の意味特徴である。これまでに抽出された意味特徴と *lāzen* 文の意味解釈との関係は、*ahten*, *belangen*, *unbilden* など人間の「内的な動き・状態」をあらわす動詞とともに用いられた *lāzen* 文は、命令形で用いられる場合がほとんどであるが、ある「行為の遂行」を意味するような命令ではなく、むしろ「〜であれ」という「願望」があらわされる。*ergân*, *geschehen* のように「行為」を動詞的に直接表現しない動詞とともに用いられた *lāzen* 文は「行為の遂行」を意味する「許可」ないし「命令」をあらわすが、「許可」から「命令」への意味解釈の移行はまだ検討してみる必要がある。*beliben*, *sîn*, *stân* と用いられた *lāzen* 文の場合は、不定動詞の主語に相当する

名詞が「もの」、「ひと」である場合は〈残す〉, 〈(そこを) 去る〉, 〈そのままにしておく〉という意味解釈になり、主語に相当する名詞が「こと」の場合には、その「こと」がある「行為」であれば、その「行為」を〈やめる〉という解釈になる。*geleben*, *genesen*, *geni-ezen* などある「状態」をあらわすような動詞とともに用いられた *lâzen* 文の意味解釈は〈そのままにしておく〉, 〈妨げない〉という解釈になる。*lâzen* 文の意味解釈にとって重要な動詞の意味特徴は「行為」か否か、すなわち人間の意思で左右できるかどうか、という点である。人間の意思では左右できない「自発的な動き・状態」の場合には、*lâzen* 文の意味解釈は「願望」であり、*geleben*, *genesen* などのように「自発的」ではなくとも、その「状態」を維持するのが人間にできる最大の課題であるような場合には、*lâzen* 文の意味解釈は「放置」、「許可」といったものになる。一方「行為」と *lâzen* の関係は *heizen* の分析をしてからでなければ確定的な判断はできないが、注意しなければならないのは、「行為」がいつも必ず動詞的に表現されるのではなく、*geschehen*, *beliben* などの用例に見られたように、名詞的に表現されることもある、という点である。

現代語の意味解釈分類では、*lassen* の主語となっている「もの」、「こと」、「ひと」と不定動詞のあらわす事柄の間の時間的關係、意思的關係に基づいて意味解釈を認めたが、この観点より中高語の用例を見た場合、「放置」の解釈は問題なく見られる。「許可」と「使役」に関しては、現時点では保留、「惹起」、「原因」は見られない。*lâzen* の主語に「もの」、「こと」が来る例は『Das Nibelungenlied』の中では1例のみであった¹⁷⁾。その例では主語は *der tât* であり、ここではむしろ擬人化されていると考えられる。逆に、中高語にはあって、現代語には見られない意味解釈は、「願望」、「遠回しな行為表現」である。

現代語	中高語
「放置」	「ひと」、「もの」+ <i>beliben</i> / <i>sîn</i> / <i>stân</i> など
「許可」	？（保留）
「使役」	？
「惹起」	—（対応なし）
「原因」	—
—	「願望」
—	「遠回しな行為表現」

3. 中高語 *heizen*

lâzen 文の意味解釈にとって重要な意味特徴は *heizen* の用法を分析する上でも有益である。なぜならば *heizen* とともに用いられる動詞はすべて「行為」をあらわす動詞と特徴付けることができるからである。したがって「行為」をあらわす動詞とともに用いられる *lâzen* と *heizen* の間には何らかの差があるのかどうかという疑問が出てくる。この章ではこの点について検討し、「行為動詞」とともに用いられる *lâzen* 文の意味解釈を確定する。現代語では不定動詞と結び付く *heizen* の用法はほとんど存在せず、また使役の助動詞として意識されることもない。しかし中高語では不定動詞と共に用いられる *heizen* の数はかな

り多い。ここで取り上げた『Nibelungenlied』の中でも, *lâzen*+Inf. 223例に対して *heizen*+Inf.は155例とかなり頻度が高い。以下 *heizen* と *lâzen* を比較しながら中高語の使役表現について検討する。

heizen とともに用いられる不定動詞はすべて「行為動詞」と特徴付けることができる。なぜならその多くは、行為者の意思をあらわす話法の助動詞 *wellen* とともに用いられ、*「行為の遂行」*を意味する命令形で用いられるからである。

(104) *welt ir ir des gunnen, sô sol si krône tragen*
vor Etzelen recken, daz hiez ir mîn herre sagen. (1199, 3-4)

(104') *Waz mir die herren bieten, daz wil ich dir sagen.* (314, 1)

(104'') *Nu saget mir, bruoder Dancwart, wie sit ir sô rôt?* (1955, 1)

このような例が *heizen* と共に用いられる不定動詞の全てに見られるというわけではないが、かなり多くの例が行為者の意思を示唆するコンテキストでも用いられている。

heizen のほとんどは語りの部分で用いられ (約88%), 直接法が91.6%, 人称も3人称が85.5%で、「描写」の際によく用いられていると言えよう。これに対して *lâzen* は会話の部分で用いられる例が80%, 直接法は少なく (26.3%), そのかわり命令形が38%, 話法の助動詞を伴う場合が31%で、人称に関しては、会話の場面で用いられることとも並行するが3人称は24%であり、主に「場面」の当事者のことばとして用いられている。

3.1. 不定動詞の意味上の主語の有無

heizen と *lâzen* の用法の間で大きく異なる点のひとつは、不定動詞の意味上の主語の有無である。*heizen* の用例の中で不定動詞の意味上の主語があらわされている例は全体の約36.8%であるが、その場合の不定動詞のほとんどは「自動詞」である。その「自動詞」の場合でも意味上の主語があらわされていない例すら存在する。不定動詞が *heizen* および *lâzen* の両方の動詞と用いられている例に関して、意味上の主語の有無について比較してみると、意味上の主語は、*heizen* と用いられている場合には、かなり多くの場合に表現されていないのに対し、*lâzen* と共に用いられている場合には、ほとんどの場合に表現されているという違いがみられる。*lâzen* で不定動詞の意味上の主語が省略されている例は16例で、全体のわずか7%である。

(105) *〈vil edliu künneginne, lât mich der slüzzel pflegen.* (514, 1)

(106) *Der wirt hiez ze allen zîten ritterschefte pflegen.* (261, 1)

(107) *und liezet mich diu maere mînen lieben herren sagen.* (1949, 4)

(108) *ez werbent ritter edele: daz hiez iu iuwer bruoder sagen.* (1217, 4)

(109) *lât in uns tragen hinnen daz wir den recken begraben.* (2265, 4)

(110) *man hiez in ûz dem münster zuo dem grabe tragen.* (1064, 3)

gân, komen, riten, varn, stân などは「自動詞」であるため、不定動詞の意味上の主語は文法上必須であると考えられそうであるが、*heizen*+Inf.においては *nâch jm. gân* (= 'jn. holen') のように実際の行為者が省略されている場合もある。

(111) Man *hie�* nāch Gêrnōten und nāch Gîselheren *gân*. (1207, 1)

ここでは実際の行為者が表現されていないのみならず、命令者も表現されていないが、このような例は *heizen* には比較的多い。これに対して *lāzen* にはそのような例は存在しない。

(112) die geste *hie�* man *fûeren* balde an ir gemach. (799, 1)

このような表現は、ある行為とその対象となるものだけが表現されているという点で、受動文と通ずるところがあって興味深い、ここではこれ以上立ち入らない。

さて、「許可」と「使役」という内容を比較した場合、「許可」においては不定動詞であらわされる事柄生起への「意思」、「イニシャティヴ」は不定動詞の実際の行為の担い手にあり、その担い手が重要な要素であるから表示されなければならないであろう。*lāzen* とともに用いられる不定動詞の意味上の主語の表示はこの「許可」の内容に合致するものである。一方、「使役」においては、事柄生起への「意思」、「イニシャティヴ」は「使役者」にあり、実際の行為の担い手にはない。したがって実際の行為の担い手である不定動詞の意味上の主語が表示されていなくてもよいと考えられる。*heizen* における意味上の主語の省略はこの「使役」の内容に合致するものである。意味上の主語の有無の差より、中高語では、*lāzen* と *heizen* の間で、「許可」と「使役」に関して対比的に用いられていたのではないかと思われる。これまでにあげた中高語の現代語訳を見ても明らかなおと、現代語では両方とも *lassen* があらわしており、語彙による区別はされていない。

3.2. 社会的に一定した場面における不特定の人間

heizen で意味上の主語が表示されていたとしても、*lāzen* の場合とは相違が観察される。*heizen* とともに用いられる動詞自体、社会的に固定した場面（宮廷、宴、戦いの準備、褒賞など）で一定の行為をあらわしたり、特定の職業をあらわすものが多い。したがって、何が不定動詞の目的語に来るかは大体決まっており、不定動詞の意味上の主語も、言及されなくとも、その場面には必ず付随している一定の社会的機能をもつ不特定の人間（召し使い、使者など）であると考えられる。この観点から不定動詞の中で頻度の高い *gân* (22例)、*tragen* (12例)、*bereiten* (5例)、*schenken* (6例) を詳しく検討してみる。

3.2.1. *gân heizen*

gân heizen では、*gân* の意味上の主語は、*boten* (4例)、*man* (2例)、*meide*, *māgede*, *kameraere*, *jagtgesellen*, *juncvrouwen* など特定の個人ではなく、ある一定の社会的機能をもつ不特定の人間をあらわす場合が圧倒的に多く、特定の個人をあらわしている例は全体でも5例のみである。

(113) man *hie�* der *boten* einen für Kriemhilde *gân*. (224, 2)

(114) Dô *hie�* diu *küeginne* ûz den venstern *gân*
ir *hêrlîche māgede*. (……) (394, 1-2)

また *gân heizen* には *nāch jm.* (4例)、*ze hove für den küene* (2例)、*ze hove* (1例) *zen kemenāten* (2例) など特定の目的、場所を伴う場合がかなり多い。

(115) dô *hie�* diu edel frouwe *nāch Gîselheren* *gân*, (1242, 2)

(116) dô *hie�* man Kriemhilde *ze hove für den küene* *gân*. (609, 4)

(117) man hiez die juncvrouwen *zer kemenâten*. (1687, 2)

意味上の主語が一定の社会的役割をもつ人間であるため、場面により想像が可能で、それが省略される用例があるのも納得がゆくであろう。意味上の主語が特定のものとして語彙の中に取り込まれていると考えられる動詞には *besenden* があげられる。

(118) oder von welchen schulden mich der künec habe *besant*.> (856, 4)

この点に関して *gân lâzen* は大きく異なる。会話の場面で使われているため、特定の個人という場合がほとんどで、*boten*, *mägede* のような社会的機能・身分で命名される不特定の人間という例は少ない。多くの場合固有名詞と同一視できる人間である。また *zuo*, *für* などの方向規定を伴うものの、その対象もその場面で相対的に決まってくるもので、ある一定の絶対的な場所ではない。

3.2.2. tragen heizen

tragen heizen では、*tragen* という行為の実際の担い手が表示されている例は見つからなかった。目的語になるものは、*scaz* (2), *golt* (3), *lade* (1), *schilt* (1), *sätele* (1) と「もの」で、その他暗殺された *Sifrit* の死体が 3 例、*Etzelen sun* が 1 例である。

(119) Den schilt *hieze* dô Hagene von im *tragen* dan. (1703, 1)

(120) dô *hieze* die edel frouwe zuo dem münster *tragen*

Sifriden den herren, ir vil lieben man. (1039, 2-3)

tragen heizen であらわされている状況は、〈財宝〉、〈武具〉、〈死体〉の運搬で、これらは身分の高い人間が自ら直接行うものではなかったのであろう。これに対して *tragen lâzen* では意味上の主語が表現されていない例は 5 例中ひとつで、それ以外は特定の人間が意味上の主語として表現されている。

(121) ouch möhten wir si gerne zen Hiunen krône *lâzen tragen*. (1170, 4)

tragen lâzen においては、ある行為の場面が *tragen heizen* と同じだとしても、行為の実際の担い手が明示されているため、誰がその行為を実際に行うのか、ということが重要であり、これに対して *tragen heizen* の場合には、経過はともあれ、ある行為が実行されることが重要である、と考えられる。

3.2.3. bereiten heizen

bereiten には、“jm. (dat.) etw. (acc.) *bereiten*”と“sich (acc.) *bereiten*”のふたつの用法が存在するが、前者の場合〈装備〉の対象は *kleit*, *gewant* である。*heizen* とともに用いられていない用例でも〈装備〉の対象は *wâfen*, *gewant*, *kleit*, *sätele* である。このように対象が特定の「もの」であるため、sich (acc.) *bereiten* のように対象物を明示しなくても済むのであろう。ここでは〈装備〉の対象物が語彙のなかに取り込まれていると考えられる。

(122) dô *hieze* er in *bereiten* harte hêrlîche gewant. (1408, 4)

(123) dô *hieze* er sich *bereiten* die von Niderlant.

die *Sifrides recken* suochten strîtlich gewant. (888, 3-4)

なお *lâzen* には *bereiten* とともに用いられた用例は見つからなかった。

3.2.4. *schenken heizen*

bereiten heizen と同様なことが *schenken* にもあてはまる。この動詞の目的語は明示されている場合はいつも *win* であるが、表現されていない場合の方が多い。しかし目的語はその場合でも *win*, 少なくとも〈飲み物〉が暗示されている。

(124) *dô hiez man balde schenken den gesten guoten win.* (1668. 3)

(125) *Man hiez den gesten schenken unt schuof in ir gemach.* (408, 1)

schenken heizen では *schenken* の実際の行為の担い手の表現された例はなかった。この行為がある一定の場面（「宴席」）で一定のパターンで行われるものであるため、表現する必要がないのであろう。

以上のように、*heizen*+Inf. の不定動詞が表す事柄は、社会的に特定の場面で、一定のパターンをもつ行為であり、実際の行為の担い手は表現されたとしても、ほとんどの場合、社会的にある特定の機能を果たす不特定の人間である。*lâzen* の用例におけるように、個別の行為者、特定の人物、そして個別の人間の間での「意思」関係として問題とされているのではなく、不定動詞のあらわす〈一定のパターンを持つ行為の社会的機能要素〉として了解されている。事柄の性質、すなわち〈社会的に特定の場面で一定のパターンをもって行われる行為〉という特徴から意味上の主語は了解され、表現する必要がなく、*heizen* の主語にある人間の意思と不定動詞であらわされる行為のみが問題となる、という場合も「使役」の内容に合致するものである。このような場合は、現代語では次の例にあげるように *lassen* によってあらわされる。

(126) *Da ließ Jenny ihre Kleider färben.* (876)

(127) *Die Materns hatten sie (die Mühle) im Jahre achtzehnhundertfünfzehen, (……) erbauen lassen;* (637)

結局「許可」か「使役」かという区別も、事柄の性質そのものに対応している面があるが、中高語ではその区別が比較的明確に *lâzen*, *heizen* という語彙によって区別されていたと考えられる。現代語の *lassen* は、自分が直接あることを引き起こしたのではない、という「間接的作用」のシグナルとして位置付けられたが、中高語の *lâzen* にはこの機能は認め難いように思われる。なぜなら *lâzen*+Inf. も *lâzen* の主語と不定動詞のあらわす事柄の作用関係から見れば、「間接的作用」ではあるが、*lâzen*+Inf. においてはそれ以上に「誰が」その行為を実行するか、そしてそれに対する「許可」、「禁止」という点に重点があるからである。行為の実際の担い手の表示がほとんどの場合になされている点は現代語 *lassen* の用法とも大きく異なる。誰が行為の実際の担い手であるかを問題とせず、直接ある事柄を引き起こしたのではない、という「間接的作用」を示しているのは、中高語の場合その用法から考えて、むしろ *heizen* にあると言えよう。

lâzen 及び *heizen* の比較より、現代語 *lassen* ではコンテキストに委ねられている「許可」、「使役」という区別は、中高語では *lâzen*, *heizen* というふたつの語彙によって区別されていたと考えられるが、このことは中高語 *lâzen* における「許可」の一義的な意味解釈を保障するものであろう。中高語では *heizen* が担っていた「使役」の意味解釈が現代語では *lassen* が担うようになり、中高語 *lâzen* に本来あった「許可」の意味解釈は、現代語 *lassen* では「使役」の意味解釈とともにコンテキストに委ねられ、「許可」、「使役」という意味区別は

相対化されていると言えよう。このことは単に lassen の意味解釈が拡大されたことを意味するばかりでなく、中高語 lâzen にはなかった体系的な意味機能、すなわち「間接的作用」の明示という意味機能を担うようになったことを意味する。これにより、現代語 lassen は具体的な意味から、事柄どうしの関係をあらわす抽象的な意味へと発展してきたと考えられる¹⁸⁾。

註

- 1) 使用したテキストは Bartsch, Karl/de Boor, Helmut: Das Nibelungenlied, Wiesbaden²¹1979
- 2) 考察対象は lassen および lâzen が不定動詞とともに用いられているものに限定する。
- 3) Brinkmann, Hennig: Die deutsche Sprache — Gestalt und Leistung, Düsseldorf 1971, S. 293
Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim: Deutsche Grammatik — Ein Handbuch für den Ausländerunterricht, Leipzig 1972, S. 156
- 4) 使用したテキストは “Danziger Trilogie”, Luchterhand, einmalige Sonderausgabe Februar 1980
- 5) たとえば fallen — fällen のような対応関係。fällen の目的語は「木」など特定の対象に限定されていて、fallen の主語になる名詞のすべてが fällen の目的語になるわけではない。
- 6) Shibatani, Masayoshi: The grammar of causative constructions: a conspectus. In: Syntax and semantics Vol. 6, 1976, S. 35
- 7) 例文は国立国語研究所編『動詞の意味・用法の記述的研究』(1972)からである。疑問符は同論文では正しいとされているが、筆者の語感からすれば不適と思われるものである。
- 8) Brinkmann, Hennig: Der Austausch zwischen den Wortarten im Deutschen. In: Die Wissenschaft von deutscher Sprache und Dichtung (=Festschrift für F. Maurer), Stuttgart 1963, S. 18, 20; “In allen diesen Fällen wird allein der Inhaltswert des jeweiligen Verbums substantivisch aufgefaßt. (……) Sie transponieren den Satzwert des Verbums in die Wortart des Substantivs, (……) Auf diese Weise werden Satzinhalte als Satzglieder verfügbar.”
Kishitani, Shoko: >got< und >geschehen< — Die Vermeidung des menschlichen Subjekts in der ritterlichen Sprache (Hartmann von Aue) —, Düsseldorf 1965, S. 127; “Ein Ausdruck mit potentieller S-P-Struktur unterscheidet sich durch seine Auflösbarkeit in zwei syntaktische Elemente, Subjekt und Prädiakat, von einem solchen Ausdruck, der je ein Wesen bezeichnet, z. B. einem Konkretum wie *ros* oder einem Individualnamen wie *Îwein*.”
- 9) Kishitani, Shoko: a. a. O., S. 142; Hartman von Aue のテキストの中で「ひと」の3格を伴わない ergân の用例に関しても、同様な結果が出ているが、『Das Nibelungenlied』における ergân の用例では、ハルトマンのテキストに多くみられる、「人間と人間の間の行為」を表す名詞が少なく、前出または後出の事柄全体をうける代名詞が多い。また liebe, leide などともに用いられている例も多く、ハルトマンのテキストにおける ergân に較べるとニベルンゲンリート の ergân は geschehen に近いと言えよう。
- 10) a. a. O., S. 166; このことはハルトマンのテキストでも同様である。
- 11) a. a. O., S. 170; “Durch das zweistellige Verbum *geschehen* B (mit einem Dativ der Person) wird der Vorgang nicht nur von seiten des Vorgangs selber her, sondern auch in bezug auf

den daran teilnehmenden Menschen aufgefaßt; dadurch wird ein Vorgang als eine menschliche Daseinsweise spezifiziert aufgefaßt.”

- 12) 池上嘉彦:「する」と「なる」の言語学, 大修館1981, 198ページ
- 13) ニベルンゲンリート以外のテキストではこの割合は, ハルトマンのエーレックでは24.6%, ヴォルフラムのバルツィファルでは52%であった。
- 14) *hoeren/sehen/schouwen/wizzen lâzen* も頻度は比較的高く, 全体の約24%を占める。これらの用例は現代語のそれと特に大きな差は見られないため, ここでは特に考察の対象としていない。
- 15) このような例以外に, 述語を伴う *sin* の用例も見られる。
lât iu sin niht ze gâch. (425, 2)
swaz ich erwerbe schande, die lât mîn eines sin. (514, 3)
got lâz' iu iuwer erbe immer saelic sin (694, 3)
dô sprach aber Hagene: <lât mich den schuldigen sin. (1131, 4)
daz (kindelîn) ensult ir niht, vrouwe, weise lâzen sin. (1087, 2)
 これらの例においては〈やめる〉という意味解釈ではなく, *sin*+述語でひとつの動詞をなすと考えられるが, 動詞の意味は「行為」であったり (*gâch sin, mîn eines sin*) そうでなかったりするが, 現代語の感覚からすれば状態をあらわす動詞 *sein* を用いなくて, 「行為」をあらわす動詞を直接用いればよさそうに思える。その意味では *geschehen lâzen* の用法に通じるものがある。また一方では *saelic sin* のように, 後に出てくる *genesen, geleben, geniezen lâzen* に通じるものもある。
- 16) Lexer, Mathias: *Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch*, Stuttgart ³⁷1983
- 17) *der tût wil mich niht langer iu und Etzele dienen lân.* (2067, 4)
- 18) 意味がより一般的な方向へと変化することは, 音の響きを表す動詞の古高語から中高語への変遷を分析した Löttscher, Andreas: *Semantische Strukturen im Bereich der alt- und mittelhochdeutschen Schallwörter*, Berlin/New York 1973 でも指摘されている。